
高嶺のハナ

月見岳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

高嶺のハナ

【Nコード】

N4265R

【作者名】

月見岳

【あらすじ】

僕はツいていない。貧乏だし影が薄いし友達だつてほとんどいない。でも、そんな変化のない平凡な日々が、僕には小さな幸せだった……。なのに……。ある日自称天使と出会い、幼なじみを恋人にしなければ命はないとか脅迫されて、平凡は崩壊。しかも、幼なじみを恋人関係になるにも壁は立ちばかり道は困難。愛か死か、さあどうするよ！書き直すよ）11月中削除

ACT・0 & 1（前書き）

予定：10話ちよつと

更新：きつと不定期

進捗：投稿時点で1話目書き終えたところですがなにか？

完成度：殆どプロットだから期待するな

まとめ：10話ちよつとで終了予定です。殆ど書いていないので更新は不定期です。思いつき……というより脳内に浮かんでいるプロットを書き写し、肉を付けたものです。小説として期待しないでください。

美貌、人柄、カリスマ性。

それを兼ね備える者を、人は”アイドル”という。

そして、この教室にも、アイドルに分類される者がいた。

——榊原 香苗。

黒い艶やかな髪が栄えるその美貌。ちょっと天然気味ではあるが、誰からも慕われる人柄。そして、誰もが心服し、生徒会長を務めるカリスマ性。

誰もが憧れ、羨み、尊敬する。

所謂『高嶺の花』というやつだ。

そんな彼女と僕は、幼なじみという関係らしい。

保育所から高校まで、ずっと同じ学校だった。

小学校まではよく遊んだけど、中学になって疎遠になり、高校に入ってから接点なんてほとんどない。

幼なじみなんていうけど、僕にとってはただの腐れ縁にしか思っていないかった。

仲がよかったことなんて、もう遠い昔のことだった。

対する僕は、これといってパツとしないどこにでもいるようなホモサピエンスで、性格は自分でも厄介なくらい根暗で内向的。

そんな性格が災いして、友達はいるけど少ないし、クラスでは存在をすぐに忘れられる希薄さを持ち合わせる。

まさに、僕と香苗は正反対の存在だった。

香苗は神様に愛され、僕は……疫病神にでも憑かれているんだろう。香苗の両親は資産家でお金持ち。やることなすこと全てが成功し、家族円満で幸せを感じていた。

対する僕は、両親は病氣と事故でなくなり、残った借金を保険金で返済し、今は細々と貧乏生活。

何をやってもうまくいかず、雨に道を歩けば、車で跳ねた泥水がかかったり、福引きをしても残念賞しか貰えない。

天に見放されたがごとく、全く運がない。

天と地、明と暗、月とすっぱん。

こんなにも立場が違えば疎遠になるのも当たり前だ。

今だって、みんなに囲まれながら、中心でにこやかに微笑んでお喋りをしている香苗を眺めては、劣等感と諦観に苛まれている。

全くもって、自分が馬鹿らしい。

「……はあ」

色々と重い何かを含んだ溜め息について、僕は夏特有の高い空を見上げた。

とても、青かった。

●

僕の1日の行動は決まっている。

朝起きて、学校行って、終わったら真っ直ぐバイト先に行って、帰ってくる。

これを繰り返して日々は勝手に過ぎていく。

青春もクソもない、味気なさすぎる毎日だ。

でも、それでいい。それでいいと思う。

恋愛で悩むより財布の中身に悩み、学校の人間関係に悩むより、近所付き合いに悩む。

僕は変化を求めない。それが、数少ない僕の幸せだった。

一人気ままに、ひっそりと年老いて死んでいく。それが、最底辺の人間である僕の未来設計。

結婚もしない。最低限のお金があればいい。交流関係なんてなくていい。

刺激的な生活なんて、僕には必要がない。ただ、静かに過ごしていきかった。

なのに、何故なんだ。

「……………うっ……………」
「……………」

何故、空から女の子が降ってきた！

●

「うまあゝ！」

次々と消えていく料理の数々。

作っては消え、作っては消え、むしろ作る前に消えていく。

もう我が家に残る食料はなく、エンゲル係数が絶賛増大中だ。

「うまつ、うまつ！おかわりお願いします！」

「……………もう食料はないぞ」

「ならば買ってこいやです！」

「……………」

なぜ、僕は怒られなければならないのだ。

「早く早く！ハリーハリーハリー！！！」

「……………」

頬にご飯粒を付けて、空っぽになった茶碗を押し付けてる少女。
空から降ってきた意味不明な少女。
背中に羽が生えている不思議な少女。
尋常じゃない胃袋をもつ大食いな少女。
……まったく、殴っていいだろうか。
無駄に良心を発揮して、拾ってこなければ良かった。
つくづく後悔している。

「なにボケツとしているんですか！早くご飯を！お米を！ライスを！
持ってくるです！あつ、おかずは鮭ハラスで」

その瞬間、僕の中で何かが弾け飛んだ。
リミッター解除、または種割れ。どっちでもいい。

「……おりよ？」

僕は少女の頭をがっしりと掴み、

「いた、イタタタタ！握力があ、強くなってるですよ！？」

握り潰そうと握力を強めた。

これは林檎だ。これは林檎だ。

何てことはない。覚醒中の僕なら潰すことは容易いはずだ。

「ミシッて、頭からしてはいけないミシッて音がしたですよぉ！？」

よく喋る林檎だ。きっと新鮮なんだろう。

早く黙らせなければ。

「タイム！タイム！ああ、凹む！頭が凹むですよぉ」

「へこめ！何にも詰まってないような頭なんて凹んでしまえ！」
「メル頭には夢と希望と妄想が詰まっているのですよ」

駄目だこいつ。何とかしないと。

夢と希望って……まるで中二病患者の頭の中身じゃないか。

あれか、世の中の厳しさと、何事もなく日々が過ぎていく平凡さが、いかに大切なものであるか叩き込まなければいけないのか。

僕は、この頭お花畑の馬鹿を拾った時点で、ルート選択を決定的にミス犯したのだ。

そう思うと、自然と手に力が入った。

「いったああああい！」

ウルサイ。痛くしているんだから痛いのは当たり前だろ。

「ごめんなさいごめんなさい！何だか知らないけどごめんなさい！
謝りますからメル頭を潰さないでください！」

ついに泣き出して懇願し始めた。

ただ、茶碗と箸はしっかりと握られて泣いているので何だか滑稽だ。
食い意地だけは張っているのだろう。

僕は小さく溜め息をついて、頭から手を離れた。

「……ところで、おかわりいいですか？」

再び悶絶する悲鳴が響き渡ったのは言うまでもない。

●

「で、お前はなんだ」

僕の前でちょこんと正座で座っている大食い天使もどきの馬鹿に言う。

「天使です」

「ああん？」

「ひい！すみません！天使なんかですみません！」

天使だあ？

21世紀のこの世の中にそんな奴がいるものか。

どうせ、コスプレだか学芸会の衣装に決まっている。

「今僕は猛烈に機嫌が悪いんだ。そんなふざけたこと言っているとまた痛い目に合うぞ」

「痛いのは嫌あー！」

「うるさい！」

甲高くうるさい金切り声を上げられては近所迷惑になるので、僕は頭に拳骨を落として黙らせた。

「いったああああい！」

「黙れ」

「はい。すみません」

僕が拳を握ってみせると、すぐに口を閉じた。

「いいか。僕は、聞きたいことは色々あるが、あえて聞かない」

空から降ってきたこととか。
行き倒れていたこととか。

背中羽とか。

その他諸々。

気にはなるけど、訳を聞くわけにはいかない。
知ると引き返すことが出来ない気がするからだ。

コイツは早々に追い出さなければならぬ。

そんな危機感を僕の直感をひしひしと感じていた。

「だから、飯食ったらこのまま回れ右して帰ってくれ」

「そんな！私を連れ込んでおきながら！」

「嘘だ！お前が僕の脚に捕まって離れなかった癖に！」

そう、もとよりこんな奴を保護するつもりなんてなかった。

だって、明らかに怪しいし、スルーしたかった。

でも、やっぱり僕は色々とツいていなかった。

隣を通り過ぎようとした時に、ガシツと脚にしがみつかれて、なし崩しの家に招くことになった。

どうしてこうなった！って僕も思う。

「むう、分かりましたです。でも、ある人のお宅を教えてくださいですよ。メルはそこに行く途中で行き倒れたのですよ」

そう言つて、ガサガサと小さなポーチの中を漁る。

目的の物が見つかったのか、分かりやすいまでに表情を明るくし、

一枚のくしゃくしゃになった紙を引っ張り出してきた。

そしてその紙のシワを伸ばそうとしていた。

一体あのポーチの中はどんな状態なんだろう。

「えっと、ここですよここ」

それは地図だった。

そして、見事な筆記体で書かれた住所らしきもの。

それを解読すると、頭が真っ白になって、現実を認めたくなくて、くらりと意識が一瞬遠のきそうになった。

いや、本当は分かっていた。地図を見たときにすべて。

でも、やっぱり信じたくない事実というのものもあるわけで……。

「僕の家じゃないか……」

額に手をやり、天を仰いだ。

…… もついやだ。

「あらら、このお宅でしたですか」

その笑顔がヤケにム力つく。殴っていいだろうか。

「ぬふふう、それなら話が早いというものですよ」

明らかに何か企んでいる悪い笑顔を浮かべ、手を口にやって怪しく笑っている。

自称天使がそんな悪人な雰囲気を漂わせていいのだろうか。

「我は天界より派遣されし天使メル！汝、新山 スバルを救済すべく、ここに出向したのです！」

茶碗と箸を持ったまま、頬にご飯粒をつけて座卓の上でそう言い放った天使は……あまりに馬鹿っぽかった。

ACT・2（前書き）

投稿するか悩んだけど、小説投稿サイトでできるのは投稿をする
と。

地震の被災者様、頑張ってください。

ACT・2

さて、日本では座卓の上に立つというのはマナー違反である。

マナー違反は厳罰を与えなければならない。例え、それが神の使いとされる天使だとしてもだ。

宗教団体辺りから抗議がくるかもしれないが、日本は多神教だし、八百の国だし、大丈夫。

だから、僕はこのクソ馬鹿穀潰し天使もどきを罰しなければ。

「とりあえず、机から降りようか……」

「へっ……」

ぽやっとしたメルとかいう天使の髪を掴み、

「いたたたたっ！抜けるですよっ！？」

思いつき髪を引っ張った。

ポニーテールだからとても引っ張りやすい。

「止めるです！メルのキューティクルな髪が！抜ける、抜けるですよぉ！」

「そんなもの飾りにすぎない」

「それは酷いです！」

メルが抗議の声をあげるが、僕は無視をする。

早く机から降りないか。

イライラが毎秒二乗で増えていく状況で僕の込める力も強くなる。

「むう……いい加減にしないとメルも怒ったのですよ！」

その瞬間、僕の視界が真っ白になった。まるで、いきなり目の前でフラッシュを焚かれたような、目のくらむような白。あまりにも目が痛くなる。

咄嗟に、視界を復帰させようと目を擦ろうとして……身体が動かないことに気付いた。

もしかしたら、音はなかったけれど、スタングレネードを喰らったようなものだろうか。

「にやははっ！どーですか！これがメルの力の一部なのですよー。これでも、1%も出してないのですよー」

憎たらしい笑い声が響くが、どこにいるのか分からない。

視界が白のまま、回復しないのだ。

「さあ、この美しいメルの真の姿を敬うのです！ご飯を頂くのですよー！」

「真の姿って……視界が回復しないから見えないのだけど」

「……にやんと！忘れていたです」

パン！

という音がした瞬間、僕の視界は復帰し、見慣れた部屋が映った。そして、驚くことが一つ。

「にやははっ！」

宙に浮き、頭には光り輝いている光輪。そして、今まで妙チクリンなアクセサリーのような小さな羽だったのが、白銀の大きな翼が背中から生えていた。

その神々しさは、まさに天使というのに相応しい。
ただ、子供っぽい口調だけは変わってなかった。

「……まさか……ほん……もの……？」

「そーなのですよー。メルは天使なのですよー」

なんていうことだ。

世も末。学校のパソコンでインターネットを見たときに、海外のオタク達の反応を見た時以上のショックだ。

あの時は、もうやだこの星……とか思ったけど、天界も色々と終わっているかもしれない。

こんなのが天使だなんて。

宗教団体も真っ青だ。

「……なんで」

「なんでって……メルはスバルさんを救済するために来たのですよ
〜？」

いや、そうじゃない。僕が言いたいのは……

「なんでお前のようなのが天使なんだ！」

「ひ、酷いですよー！根底から否定された気分ですよー！」

やはり、外見が神々しく変わっても、中身は変わらない。

少しは猫を被ればいいものを……。

しかし、このまま金切り声を上げられても近所迷惑になっは困る。
とりあえず、とつとと用事を済ましていただいて、とつとと帰って
いただくのが賢明かもしれない。

「あゝ、それでメルはなんで僕のところに来たんだ」

「むう……それはスバルさんを救済するためなのですよ」

うん、聞いた。

しかしだ、悪霊とか怨霊とか悪魔だとかドッペルゲンガーとかに取り憑かれた感じはないし、なんというか……救済される見に覚えがない。

「ところでスバルさん。あなたは色々とツいていないですねー」

まあ、確かにそれはそうだ。びつくりするくらいツいていない。

運試しで上手くいった試しなんて無かったに等しい。というが無かった。

「普通の人なら正と負の割合が五分五分なんですけど、スバルさんは負がほとんどなのですよー」

……意味が分からない。

正と負？なにが？電池ですか？

「正と負って、何？」

「プラスとマイナスですよー」

いや、それは何となく分かる。

「何のプラスとマイナスなんだってことだよ」
「なる〜」

メルは納得したようにポンつと手を叩く。

「簡単に言えば魔力みたいなものです。でも、厳密に言えば違

うんですー」

パタパタとメルが翼が羽ばたいた。

「人間では『運氣』って言うんですよ。ホントーなら人間には正の運氣と負の運氣がバランスよく存在するのですー。でも、スバルさんには負の運氣ばかり存在しておかしいですのー」

「……えっと、つまり僕がツいていないのは運氣が悪いのばかりだから……ってことか？」

「そうなんですー」

メルが嬉しそうに顔を綻ばせると、背中がパタパタと羽ばたく。まるで犬の尻尾みたいだ。

「で、それがおま……メルが来たのどう関わる」

「えっと、ですねー。さっき言ったようにスバルは運氣が悪いですが、スバルさんの場合少々異常なんです。極論何ですけど、最悪この世界が滅びしかねないほど、異常な運氣なんですー」

間延びした口調でサラツと恐ろしいことをおっしゃる。

「メルはそんなスバルさんの運氣を正常化するために天界から派遣されたのですよー！」

「いえい！とVサインをやっているメルを後目に、僕はただ悩んでいた。」

どうしよう。あんまり説明の意味が分からなかった。

もしかして、僕って頭が弱かったのだろうか。

ただ運が悪いだけで世界が破滅する意味が分からない。

そんな訳ないじゃんって思ってしまう。

「とりあえず、スバルさんの運氣悪化の原因は分かっているですよー」

そう言つて、座卓の上に置いたのは何も書いていない古びた羊皮紙。

「にやふふ……しかと目に焼き付けるですよー！」

えいっと言つメルの掛け声と共に羊皮紙が光り出す。

そして、次第にその光は色鮮やかになり、じんわりと輪郭を構成する。

しばらくすると、テレビのように、街の風景が映し出されていた。

「……検索……いたです」

パツと映し出されていた風景が切り替わり、一人の少女の顔が映る。その少女を、僕は知っている。

「榊原 香苗さん。この人がスバルの悪運の原因です」

「……どうということだ」

「簡単に言えば、彼女がスバルさんから正の運氣を奪い取っているということですよ。そして、彼女の負の運氣をスバルさんに送りつけている……つまり、運氣の交換が行われているのです」

羊皮紙から光が消え、映像が途切れる。

メルは羊皮紙をくるくると丸めると、ポーチの中にしまい込んだ。

「榊原が僕の運氣を奪い取っているのか」

「そうですー。でも、彼女は何も知らないはずですよー。無意識で行われていることなのですー」

つまり、空気を吸うのと同じように、榊原は僕の運気を奪い、悪い運気を押し付けてくるということか。
なんと迷惑なことだろう。

「でも大丈夫なのですー！そのためにメルが来たのですー！」

えっへんと、ない胸のくせにメルは胸を張った。

「何だか馬鹿にされた気がするですー……」

「それより、それならさっさと用事を済ましてくれないか。僕だって暇じゃない」

別に、考えていたことが悟られそうになったから話を逸らしたわけではない。

正直、そんなことはどうでもいいから早く出て行っ欲しかった。
話を合わせるのもつらい。

「えっと、それがですねー……」

途端に歯切れの悪くなるメルに、僕は嫌な予感がした。

こっという予感僕はよく当たる。何せ人一倍ツいていないのだから。

「メルの用事はスバルさんと香苗さんの運気のバランス異常を正常化する為なのですが……」

メルは言いにくそうに、指遊びをする。
いいから早く言え。

「その方法は、当事者同士が精神的に強く結びつくことが前提なの

ですよ」

「……は？」

なんだ。何が言いたい。

いや、何となく分かっているが、違うと思いたい。

しかし、ツいていない僕は、どう抗っても結局はツいていないのだ。

「とりあえず、スバルさんは香苗さんと恋人同士になってくださいですー！」

「なんでだあああああ！」

思わず絶叫した。

いやいや、なんでそうなるの。

「精神的に一番強く繋がる関係は恋人ですよー。肉体関係が更にあればいいですよー」

いやいや、有り得ない。本当に有り得ない。

そりゃあもう、水と油が混ざるくらい有り得ない。

「界面活性剤を使えば混ざるですよー」

うつさい。黙れ。それぐらいは知っている。

それよりもだ。僕と香苗がその……恋人関係にならないといけないとか意味が分からない。全く話が見えない。

「どうして恋人関係にならないといけないんだ！僕が！香苗と！」

「言ったですよー。運気のバランスを正常化させるためですよー」

「それとこれと、どうやったら話が繋がるんだ！」

「それはですねー。精神的な繋がりがないと上手く術式が発動しな

いんですー。失敗してドカーンと大爆発なんですー」

へらへらと笑っているメルの顔を見ると、無性に腹が立つ。
というか、爆発するのか。

「別に恋人じゃなくても——」

「恋人となるのが、精神的繋がりが強いですよー。別に夫婦でもいいですよー」

「いや、友達とかでよくない？」

「繋がりが弱いんですの。幼なじみでもまだ弱いんですの。だから駄目なんですー」

とにかく、駄目らしいとのことだった。意味は分からないが。
つとまるところ、メルの言うことを要約するところだ。

僕の運気は香苗に奪われていつて最悪な運を持つことになり、それを改善すべくメルは天界から派遣された。

メルのよく分からない術なんかで、改善する方法はあるけれど、
そのためには僕と香苗が恋人になる必要があり、あわよくば肉体関係……つまり、合体というか営みというか……とにかくやれということだそうだ。

……うん。物凄くぶっ飛んでいる。

今時のエロゲーでもないよ、こんな設定。

正直、嫌だ。

「僕は別に運気がどうとかどうでもいいのだけど」

「それは困るですよー」

メルの翼がしなっとしおれた。

「スバルさんがよくても周りが困るですよー。他人に迷惑かけては

いけないんです」

そういうお前は僕に迷惑をかけているけどな。

「別の方法とか、どうにかならないのか」

「ないことはないです」

「本当か！」

渡りに船じゃないか。

僕は思わず身を乗り出した。

「はい。スバルさんが死ねばいいんです」

「……は？」

死ねばいいんですー？

いや、そりゃないよとつつあん……。

まだ、16と数ヶ月しか人生を歩んでいないのに、死ぬとか有り得ない。

「いやいや、死ぬとか有り得ないし」

「じゃあ、恋人に」

「それも嫌だよ」

なにその極論。

選択肢が厳しすぎるんですけど。

「さあ、恋人にするか死ぬか、どっちですかー」

にやにや、じりじり。

にやけた顔で、メルは僕にゆっくりとにじりよってくる。

今ここで、決断しろということだろう。

「待て待て！プランC！更なる代案を要求する！」

「却下なのですよー」

じりじりと、確実ににじりよってくるメルの手に、いつの間にか人の大きさほどある大きな鎌が握られていた。

待て！それは死に神が持つんじゃないのか！

お前は天使だろう！

そしてついに、僕の背中が壁にぶつかり、これ以上後退する事ができなくなった。

「Love or Death？」

ちやきりと金属音をたて、鎌の刃先が僕の首に添えられた。
絶対絶命。万事休す。

「ラブ オア ですう？」

もう、選択肢なんてないじゃないか。

「……ラブで」

そう僕が答えた途端、メルは太陽のような満面の笑みを浮かべた。
一方僕は、心の中は雨だった。

これからどうしよう……。――

ACT・3（前書き）

ラブコメ？

違うと思います。

ACT・3

榊原 香苗を恋人にしろ。さもなくば貴様の命はない。

そんな感じの脅迫を受け、しぶしぶ同意してしまった僕は、いつもよりけだるい朝を迎えている。

原因はただ一つ。

「さあさあ、今日も元気にいくのですよー！」

僕の頭上に浮かぶ、やたらハイテンションな天使である。

朝は低血圧気味である僕にとっては、頭に声が響いて痛いし、実害でしかない。

殴っていいだろうか。

「な、なんですかーその目は！メルを睨んだって現実是不変わらないのですよー！」

そんなことは百も承知だ。

だが、この目の前にいる存在自体がふざけきっているこのウルサイ鳥は現実なんだろうか。

もしかしたら、僕はまだ夢を見ているのかもしれない。

この鳥を黙らせれば、静かで爽やかな朝を迎えるのだろう。きっとそうに違いない。

だから、そう。

「な、スバルさん……？押し入れを開けてどうするですか？」

やらなければ。

「ば、バットなんか取り出して……」

これは夢なのだから。

「ちょ、待ってください！高く振りかぶってこっちにこないでくださいですー！」

さあ、こんな悪い夢は終わりにしよう。

「いいいやあー！」

ブンッ！

僕が思いっきり振り下ろしたバットは、メルを捉えることは出来ずに虚しく空をきる。

「ちっ……」

「ななななな、なんなんですか一体！」

慌てふためいているメルの無事な姿を確認して、思わず舌打ちをする。

「メルが何をしたっていうですー！」

何？

そんな事決まっている。

目の前の悪夢のような惨状のことだ。

「お前はやってはいけないことをやってしまった」

「えっ」

呆けた顔をするメルを一瞥し、僕は手にもつバットで座卓を指した。

「そう！このお前が勝手に作った朝食！あり得ないんだよ！量が！」

座卓いっぱい広がる皿。皿。皿。そして皿。

小さな座卓には収まりきれず、豊、そして台所にも皿は溢れていた。ただ、皿である。その上には何も載っていない。いや、残っていないかった。

「そして、何一人で全部喰ってんだよ。うちにある食料を勝手に全部喰いやがって！馬鹿か！食いしん坊馬鹿か！」

何もないのだ。

冷蔵庫の中も、昨日は残っていた保存食として置いていたレトルトやカップ麺も。

全て。

一夜にしてこの馬鹿天使……いや、もう天使なんかじゃない。鳥だ。鳥。この馬鹿鳥に食い尽くされたのだ。

おかげで何もない。

「いいじゃないですかー。お腹空いたんだからご飯食べてもいいじゃないですかー」

「限度つてものがあるでしょうがー！」

「メルに死ねっていうんですかー！」

「そんな食った方が死ぬだろうが！っーか死ね」

「酷いですー！」

「うっさい！」

ぶん投げたバットは、くるくると回転しながらメルに直撃した。そのまま目を回し、メルは昏倒する。

うん。何だかスツとした。

まったく。騒がしい朝を迎えてしまった。

これで少しは爽やかな朝になっただろうか。

「ふう」

僕は小さく息をついて、制服に着替えることにした。

●

朝ご飯を食べ損なった僕は、いつもより更に低いと思える血圧で学校に向かうことになった。

ちなみに、メルは昏倒したまま放置している。

「……あら、おはようございます」

「あ、大家さん。おはようございます」

オンボロアパートの部屋を出た時、このアパートの大家さん……の娘さんが通路を掃除をしていた。

ご苦労様ですって言いたいけれど……この大家さん、同じ高校に通っている同級生なのだけれど……。

掃除をしていて遅刻しないのだろうか。

「……大家さん、遅れますよ？」

「えっ？」

大家さんは、腕時計と僕を見比べて、

「もうこんな時間!？」

時間を確認した途端に慌てふためき始め、長い髪を結んでいたバンダナを解いた。

「学校行かないと! ああ! お掃除用具片付けなきゃ!」

手に持った筭がバタバタと振り回され、余計にゴミが舞っている。

「にゃああ! せっかくお掃除したのに!」

ドツタンバツタンドタドタドタ……。

慌てすぎだろうと思える程、騒々しく大家は駆けていく。

美人で気だてもよくていい人なんだけど、あの重度なまでのおつちよこちよいと、

「わひゃあ!」

ドジな属性がなければ、非のうちようがないのだけどなあ……。

お裾分けで貰う煮物とか美味しいから、料理だって上手なはずなのに…… もつたいない。

「大丈夫ですか」

物置の前でスツ転んでいる大家さんに、僕は非常に紳士的に手を差し伸べる。

スカートが捲れて、ピンクの何かが見えていることは、あえて言及しない。

興味はない。ただ、眼福でした。

「あつ……ありがとうございます」

「いえ、こちらこそ」

「……………」

おつと、いけないいけない。

危うく口を滑らせるところだった。

「では、僕は学校に行きますので」

「あ、はい。いつてらっしゃい」

「いつてきます」

僕は朗らかに手を振る大家さんに見送られ、学校に向かった。

……って、大家さん、自分も学校に行かないといけないこと忘れてるんじゃないだろうか。

●

学校では、僕ははぶられていることが多い。

何故かは知らない。気づいたらそうになっていた。

だからだろうか。僕の存在感というものは、その辺の石ころ並みに希薄なのだ。

そんな僕に、高嶺の花である榊原 香苗と恋人になれとか……無理ゲーすぎる。詰みだ、詰み。

既に一手からチェックメイトだ。

確かに幼なじみではあるが、幾年月が流れて、幼なじみというより腐れ縁という認識でいる。

もう、昔みたいに仲はよくはない。榊原だって、知り合いというレベルより、完全に他人という認識だろう。

第一……僕は……。

「……はあ」

どうしろっていうんだ……。

陰鬱な気分のまま、僕はいたずらに時間を消費して、授業を聞き流していくこと数時間。

お昼休みに突入する。

「……腹減ったな」

どんな気分でも、お腹は空くものだ。

若干出遅れた感はあるけれど、僕はいつも通り食堂に向かう。

今頃は、人気メニューは売り切れ、食券を買う機械の前には列をなしているだろう。

そう思つて食堂に入ると、そこには案の定長い行列が。

ああ、まったく。ウチの高校はどうしてこうも食堂派の人間が多いのだ。

弁当派はいないのか、弁当派は。

ちなみに僕は食堂派だ。

いつも同じメニューを頼んでいる。

素うどん。

質素である分、一番安いメニュー。

味も悪くはないけど、ほぼ毎日食べていれば飽きてくる。

正直、辟易している。

でも、これを食べ続けなければ我が家の家計は火の車となる。仕方がないのだ。

「……はあ」

今日も今日とて素うどん。

どう見ても素うどん。

きつねも天ぷらも何もない。
うどんが一玉。それだけだ。
いと虚し。

適当に空いていた席に座った。

「……ん？」

ふと、食堂の一角に、不自然な人の空間が空いていることに気づいた。

この混み合った食堂なのに、そこだけ何故か誰も座らない。
いや、違う。よく見ると、数人いる。その周りが不自然に席が空席になっている。

「……なんだ、あれ」

うどんを啜りながら、観察する。

んゝ、あれはもしかして中心にいるのは榊原 香苗じゃないか？

そして、その周りにいるのはよくいる取り巻きじゃないか。

まるで取り巻きが榊原を守るように布陣して、近付こうとする人に対してあからさまな威嚇を行っている。

中心にいる榊原は、さぞかし食べづらいだろう。

「……はあゝ、スゴいですー」

「ゴフア！」

突然、頭上の方から聞こえた声に、思わず啜っていたうどんを吐き出しそうになった。

くそ、むせた。

しかも、周りにいる人の視線を一身に受けているじゃないか。

「……大丈夫です？」

何故、こいつがいる。

自称天使の馬鹿鳥メル。

僕の頭上を呑気にプカプカと宙に浮いているのだが、誰も不思議に思わないのだろうか。

もしかして……僕以外には見えてない？

いや、そんな事はどうでも……よくはないが、今はどうでもいい。とにかく、この馬鹿鳥を何とかせねば。

「おいしそうですー」

あげないぞ。

僕は急いでうどんをかき込むと、空になった鉢を返却口に置いて、メルを連れて足早に食堂を去った。

●

スバルが去った食堂。

そこで、榊原 香苗はスバルが去っていった出入り口の方をぼんやりと眺めていた。

「榊原さん？」

「……えっ、なに？」

「ぼーっとしてましたけど、どうしました？」

「あ、ううん。何でもないよ」

そう言いつつも、心中はそれどころじゃなかった。

(……なに、あのスバルちゃんに憑いていた子)

そう、香苗には見えていた。

スバルの頭上に浮かんでいたメルの姿が……。

そして、香苗自身も周りの反応を見て、メルの姿が他者には見えていないということをすぐに理解していた。

なら、尚更彼女の正体が気になる。

しかし、それは今の香苗にとっては難しい。

（スバルちゃんとは……疎遠になっちゃったもんね……）

昔はずっと一緒にいて仲が良かった。

それがいつからだっただろうか……いつしかあまり一緒にいなくなり、遠く離れてしまった。

ふと、香苗は昔を思い出す。

……そうだ。今のよう慕われるようになって、みんなから注目されるようになってから疎遠になったような気がする。

（思えば、スバルちゃんの為に頑張ったのに……結局、私は何も……）

そうだ。何も出来ていない。

それどころか、関わりがなくなって遠ざかってしまった。

あの時から……。

両親が宝くじが当たって、やった事業が成功。やることなすこと何でも成功した。

でも、その時スバルちゃんの家では、借金の連帯保証人になっていたせいで借金を背負わされ、今まで住んでいた家売り払って……

……そして、スバルちゃんの両親が事故で亡くなった。まるで正反対。

そう、この時からスバルちゃんと疎遠になったんだ。
昔みたいになれるだろうか。

（私の気持ちは昔から変わらない……）

●

ズンズンと歩く。早歩きで。

とにかく、人気のないところに行かないとならない。
とりあえず、屋上に行こう。

うちの高校の屋上は非常に生徒達に人気がないから大丈夫だ。
屋上に出る鉄の扉を乱暴に開くと、そこはコンクリートが所々剥が
れた屋上。

案の定、誰もいない。

「よし……」

さて、後の問題はメルだ。

この馬鹿鳥、どうしてやろうか。

「スバルさぁくん、どうしたんですかー」

頭上の浮遊物をきつと睨む。

「どうしたもこうしたもあるかぁ！どーしてお前がここにいる！」
「決まってるじゃないですか」。スバルさんの恋路を助けるため
ですー」

「いらん！第一、僕は榊原とは恋人になるつもりはない！つーか、
勘弁してください！」

「またまた、照れちゃって。ウブなんですー」

違う違う。そうじゃないから。
僕は嫌なんだ。そういうのが。

「……所で、こっちに来た時から気になってたんですけど」

そういつて、メルが僕を頭からつま先まで舐めるようにして見る。
何だか背筋に寒気がはしってちょっと気持ち悪い。

「言っちゃ悪いですけど……スバルさんって、変な趣味を？」

「……はあ？」

なにが？としか言えない。

「服装がそのー……」

服装？

別に变なところはない。普通の制服だし、何の問題もない。
みんなと同じ制服だ。趣味も何もない。

「普通の制服だけど」

「えっ、あつと……」

「なんだ。はつきり言え」

もしかして、天界ではこういう制服をみんなが着るのは変なこと何
だろうか。

「その……スバルさん。なんでスカート何ですか」

「……………」

えっ？

何か変？

「女装って、言っんですか？まあ人それぞれなんで深くまでは——」
「——ちょ、待て待て」

こいつ、なんて勘違いしてやがる。
やっぱり、馬鹿鳥は馬鹿だったか。

「僕は、女だぞ？」

「……えっ」

メルの顔は、ぽけつと茫然としていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4265r/>

高嶺の八ナ

2011年11月13日23時10分発行